

発表要旨・討論の概要

作反応によって、より暗示効果を挙げようとするものに外ならないのである。

913 催眠感受性と人格特性に関する研究

斎藤 稔正(京都大学)

目的：催眠感受性と人格特性との関係を調べ更にその関係を催眠時の現象に類似した日常体験と比較検討する

方法：1) 被験者、大学生50名(男女各25名) 2) テスト材料、矢田部 Guilford 性格テスト、スタンフォード催眠感受性スケール、日常の催眠様行動に関する質問紙(Ås & Laver, 1962) 催眠は個人誘導で行なった。

結果と考察：性格テストの12特性のうち、男子は攻撃的、女子は回帰性、神経質、客観性欠如が、全体では回帰性、攻撃的、客観性欠如が低いけれども、それぞれ催眠感受性と相関があつた。又 YG テストの一次因子中、非主尊的で男子が、社会的不適応で女子と全体が、活動的で全体が、それぞれ催眠感受性と有意な相関をもつた。

催眠感受性と質問紙の間には.55の相関が見られた。又催眠感受性と相関のあつた性格テストの一次因子と質問紙との相関も可成り高いものであつた。これは催眠時の現象に類似した日常体験で、ある程度迄、催眠感受性を予測できるという可能性を示していると考えられる。

討論の概要

この部会の発表内容をプログラムに従つて類別すると4群に分けられる。第1は幼児・児童の問題行動に関するもの、第2は直接カウンセリングに関するもの、第3は心理療法とテストの関係に基づく現象学的研究、第4は内観法、催眠療法に関するものである。

以上の各群について発表内容の要旨及び質疑・討論の経過と特徴を述べてみる。

第1群。精神病院に於ける精神障害児の実態とその処遇に関する問題点を全国の100床以上の精神病院へ郵送した質問紙の回答に基づいて検討したもの(901)。幼児の事故発生の実態では2, 3才児では関節脱臼等、上肢に多く、4.5才児では屋外事故による足部に多いがこれら資料の分析から幼児の事故防止の技術的問題についての考察(902)。保育場面で問題となるような幼児の行動特徴の観察法(903, 904)。登校を妨げる原因がないのに登校できない児童について、疾病障害や特別の家庭状況を除外した、約20例の事例研究の結果から低学年では過保護による親からの分離、独立への不安、高学年では劣等感が原因の多くであることがわかったが、これらから家族関係と問題の発生との関係についての究明がなされた(905)。

保育場面での問題行動に関する従来の研究は現場での実践記録か臨床家による事例報告が大部分であつて、大規模な調査研究は殆んど行なわれていない。然しながら小、中学校を対象としたものについては1928年の Wickman による研究以来多くの研究がなされている。

これらは二つの方向に別けることが出来よう。其の一は Peterson, D. R. (1961) の研究等で、用意されたリストに教師が該当児をチェックするやり方である。其の二は実態を探り、ひいては行動問題の構造を解明しようとするもので Wickman 以来の研究法によつて教師の評定を求め、その枠組を解明しようとするものである。

ここでの発表は今述べた所の二つの方向、乃ち実態と教師の枠組とを統合的に捉らえるとともに幼児期に試みようとしたのである。

さて、保育園、幼稚園、学校等の生活場面で教師が児童生徒を観察する場合に用意される項目や其等の分類については行動とその背景となる心理機制との関連についての仮説的な前提が重要なものとなるが、この点についての研究が充分になされねばならないであろう。又、保母の評定では受持ち別、経験年数別、教育観別等によつて分けてみても一貫した傾向は認められなかつた。一般に、保母や教師の評定についての信頼性の検討がより充分になされるべきであろう。

さらには、母集団がはつきりしないと云うサンプリングの問題がある。特に、3才児の資料が4~5才児のそれに比して少ないようである。

第2群。直接カウンセリングに関する内容では、先づ、カウンセリングの目標とする人格の健康性についてである(906)。これは従来、Actual self と real self の discrepancy によつて論議せられてきた。然して、この Actual self 概念については real self が真に反映しているのであろうか。神経症者と正常者の自己記述の相違から考察しても問題となるべきものである。従つて、自己記述による評価は客観的記述で補うことが適当であろう。

学校カウンセリングに於けるスクリーニングについては、中学、高校での教師のチェックによる行動徴候に基づく問題性、特に非行性の予測や抽出の問題等をチェック・リストや人格検査その他による資料を比較、対照して検討した(907)。

研究(908)のパーソナル、カウンセリングに於けるセラピスト経験の分析では発表者は前学会でセラピスト経験の分析を行なつたが、今回はこれをより明確にする目的で研究者自身がクライアントになつて受けたカウンセリング経験を中心に記述的分析を行ない、問題の所在を明確にした。client の内的経験を記述、分析する研究は